

トップはかくありたきもの

## 名君 保科正之①

一龍斎貞花

講談師

永田町の茶番劇。不信任案を提出した野党も野党だが、党内の不一致が原因、ひとつにまとまっていれば出せなかった。その不一致の原因もトップの責任。「めどがついたらやめる」の一言でころっと変わったお坊ちゃん前総理、それを信じた豪腕。狐と狸のばかし合いといわれる御殿の中、うまい汁を吸っている政権与党内から一揆が起きるなんてどうしようもない。復興が第一のはずだが国民をないがしろにする輩が国民の代表なんだから。この項が出る時にはどうなっていることか。

「民のための政をすれば一揆は起きない、民のための政をするように」といった名君保科正之。緊急災害対策のお手本として書いたが、もう一度、かくあってほしいとの願いをこめてきちんと書かせて頂こう。

### 秀忠の隠し子

二代将軍秀忠が、妻お江の目を盗んで、自分の乳母だった大乳母殿に仕える可憐な静を見染め、やがて静は秀忠の子を妊った。恐妻家の秀忠は発表出来ず、もし分かればお江のこと、赤子どころか静の命も危ういと宿下がりさせたものの、親族会議の末、「お江様が知れば、静どころかわが神尾一族も危うい」と中絶。しかし秀忠は静のことが忘れられず、再三の催促に江戸城に戻り静は再び懐妊。また宿下がりし中絶という意見も出たが、「将軍様のお子を二度も水に流すはいかがなものか、たとえ一族が斬られようとも出産させてあげよう」という弟の意見で出産。武田信玄の二女で穴山梅雪未亡人見性院のもとで庇護させておりましたが、矢張り武家に預けねばと、高遠城主保科正光の養子に。秀忠も「あれは忠義の者、正光のもとならばよいぞ」養育料として5千石加増し3万石に。正光が亡くなるや家を継ぎ保科正之となります。お江が亡くなったあとも、秀忠と親子の名乗りを上げることは出来なかったが、三代将軍家光は、仲の悪かった弟の忠長と違い、誠実な正之を信頼しただ一人の肉親として重用、江戸城桜田門内に屋敷を与え正之を留守居役に。その後山形の鳥居忠恒が亡くなり跡継ぎなく、そのあとへ入り高遠3万石から一気に20万石。これは家康が、御三家をつくったように、家光は

自分を支えてくれる親藩づくりでした。

「家光公を兄と思わず忠実な臣下として仕えねばならぬ」と心に誓う正之。

天候不順で飢饉に見舞われるや、藩の米倉を開放して領民に米を与え、一人の餓死者も出ませんでした。

家光から鷹を2羽贈られ、將軍の狩り場で狩りを許され、獲物の水鳥2羽を持参して江戸城へ。家光が「流石上様の下さされた鷹、多くの獲物を捕りました」というであろうと思っていると

「私の腕が未熟なため2羽しか獲れませんでした」家光は不満そうに席を立ってしまった。酒井忠勝が「少し正直すぎますぞ」「2羽しか獲れなかったと申せば、上様が失望されることはわかっておりました。しかしたとえ狩りのような小さなことでも上様に嘘を申し上げることは忠誠にもとります」

嘘を言ってまで將軍にへつらってはならんと忠告、誠実さをもって仕えることの範をたれたのです。このことがやがて家光の耳にも達し、ますます正之への信頼を深めていったのでございます。

#### 四代將軍家綱の後見役

会津藩加藤明成のお家騒動から領地没収。正之が会津23万石の主、南山5万石も預り28万石だが、御三家水戸家が25万石、それより高くなってはいけなさと表高23万石、実質的には水戸家を凌ぐ家

格。前領主の失政もあり、まず領民の暮らしぶり、人情、風習などを調査した上で5ヶ条の布令を、

- 一、喧嘩口論をしてはならぬ
- 一、押し買い、乱暴な行為、博奕禁止
- 一、キリシタン信者を泊めたり、見逃してはならない
- 一、みだりに山林、寺社、他人の家の木などを勝手に切ってはいけない
- 一、旅人を困らせないで親切にする事これに背いた者は厳罰に処する。

納税の方法を明確にし、領民の不安を解消。2年間で不作続きの村には考慮する。加増されたので採用係をおいて厳しく人選し優秀な人材を大勢採用、新参古参の別なく能力に応じた禄を与え、いずれも忠勤を励んだのでございます。

家綱元服の折には烏帽子親を務め、「正之ならば決して権力を笠に着ることはない、必ず家綱を支えてくれるに違いない」と弟として遇した家光が亡くなり、11歳の家綱が四代將軍になるや、正之は後見人に就任。「徳川幕府が4代で崩壊するようなことがあってはならぬ。わしは死ぬまで会津には戻らず上様の後見人に徹する。領民の不満がない政を行えば一揆は起きない、領民が満足する政をしてくれよ」かくして正之は、22年間帰国することなく、家綱を支え民のための政を行っていくのでございます。